

# 答志島「寝屋子制度」

～ 地域が人を育て、人が地域を育てる ～

三重県鳥羽市の答志島は、東西約6km、南北約1.5kmの伊勢湾内最大の島です。古くから海と密接に関わり、独自の文化や風習を色濃く残しながら現在も約2,000人が生活しています。人口の約3割が漁業を営み、港は活気に溢れています。

島という小さなコミュニティで暮らす人々の絆は深く、島全体が一つの家族のような結びつきを感じることができます。

その結びつきの強さを象徴する最たるものが、答志島の答志地区に日本で唯一残る「寝屋子制度」と呼ばれる風習です。



答志島

## 寝屋子制度とは

寝屋子制度とは、中学校を卒業した男子数名（5～6名）を「寝屋親」と呼ばれる地域の世話役が預かり、寝屋親の家の一室を借りて寝泊まりさせ、戸籍上のつながりのない者同士が、実の親子・兄弟のように絆を深める制度です。

元来、「寝屋」とは若者たちが寝泊まりする部屋をさす言葉で、その寝屋で寝泊まりする若者たちを「寝屋子」と呼びますが、現在は、制度そのものを「寝屋子」と呼んでいます。

また、若者たちに部屋を貸し、世話をする家主を「寝屋親」と呼びます。寝屋親には、誰でもなれるわけではありません。若者たちの親が相談し、島内でも人望が厚く、安心して若者たちを預けることができる家を選び、引き受けてもらうようお願いしていきます。

寝屋親を引き受けるということは、若者たちを預かる責任が発生すると同時に、自身の家族の生活にも関わることになるため、それなりの覚悟が必要となります。しかし、寝屋親自身も寝屋子制度を経験し、地域に育ててもらったという意識が高く、地域に恩返しをしたいという思いから引き受けている方が多いようです。



## 寝屋子たちの生活

寝屋子たちは自宅で食事を済ませ、午後8時頃になると次々と寝屋親の家に集まります。こどもの頃から知った者同士、寝屋子に集まると他愛もない話題で大いに盛り上がり、寝屋親から与えられた一室で寝起きだけを共にし、朝になればそれぞれ自宅に帰ります。

思春期の若者たちを預かる寝屋親は、島で暮らす先輩として、寝屋子たちの相談相手となり、アドバイスを送り、時には叱り、実の親子のような関係を築いていきます。

社会人になれば酒を酌み交わし、何気ない男同士の日々のなかで、人と人との関係が培われていくとともに、島で生活する術や島のしきたりなどを自然と覚えていきます。

この生活は、中学卒業時からメンバーの誰かが結婚する25～26歳頃までの約10年間続きます。それぞれが家族を持ってからも冠婚葬祭や地域の行事など、節目節目で助け合う生涯の仲間となるのです。

以前は、中学校を卒業すると同時に漁師になる者が多かったため、毎日のように寝屋子に集まっていたようですが、現在は、ほとんどの若者が島外の高校へ進学し、さらには島外の会社に就職する者もあり、集まるのは週1、2回となっています。

また、寝屋子になるのは家を継ぐ長男と決まっていたのですが、最近は次男、三男が寝屋子になるケースも増えています。

このように時代の流れとともに姿を変えてきています。



## 寝屋子制度の歴史

かつて日本の農漁村には、答志島の寝屋子と同じように一定の年齢に達した男子が集団生活を行い、社会性を養う「若衆宿」の風習が広くありました。

寝屋子制度の発祥も、この「若衆宿」がベースになっていると考えられますが、織田信長や豊臣秀吉に仕えた九鬼水軍の将・九鬼嘉隆が、出兵の際に船の漕ぎ手をすばやく集めるためにつくったという説や網元が若い衆を一つの部屋に住まわせておく漁に出るときに便利だったからという説など様々な説があります。

また、かつて伊勢志摩地方各地に同様の制度が存在しましたが、時代の流れと共に廃止、自然消滅していき、この制度を今も受け継ぐのは、日本で唯一、答志島だけとなっています。最後に残った答志町の寝屋子の数も現在は約10軒となっています。

寝屋子制度は、1985年2月19日に鳥羽市の無形民俗文化財に指定されています。



## 地域の絆の核として

他地域の若衆宿の風習が廃止、自然消滅していくなかで、なぜ答志町にだけ残ったのかを考えると、古くから漁師町であったため、漁そのものや船掃除など、大勢の人々が協力しないと成立しない作業が多く、それがこの制度が今日まで存続している一つの要因であると考えられています。

それに加え、人と人のつながりを強固にし、地域の絆の核となる風習として根付き、島での暮らしや生業を支える基盤として、人々がその重要性や制度の存在意義を認識しているからこそ、時代の変遷とともに柔軟に形を変えることを許し、現在まで受け継がれてきています。

答志町の人々が「寝屋子はなくてはならないもの」と感じている限り、これからも受け継がれていきます。